

1 自己評価

I 評価結果

高質な学力を伸ばす【B】

A: 当初の見込みを超える取組を行うことができ、目標を上回る達成状況である。B: 当初の見込みどおりの取組を行うことができ、ほぼ目標どおりの達成状況である。

II 分析・改善方策

高質な学力を伸ばす

(1) 学びを深める授業づくり

- ・公開授業研究会等も実施することができ、よい研修の機会となった。学校自己評価アンケートでも「授業の指導内容や方法等について、教員相互の研修を積極的に行っている」の項目の数値が今年度も上昇しており、研修の効果が表れていると思われる。
- ・ICT機器を効果的に利用することで、学び合いや発表の機会が増え、能動的学習につながっている。学校自己評価アンケートでも「授業の中で、必要に応じてICT機器を活用している」の項目の数値が上昇しており、今後もさらなる活用を進めていきたい。

(2) PBLの充実

- ・教員同士の打ち合わせを適宜行い、探究プログラムを更新し、学年団全体で指導にあたることができた。
- ・岡山大学DS部による指導が希望する全グループに広げることができたことは大変効果的であった。
- ・ゼミ活動において、初めて7グループの生徒が海外の高校生と研究テーマについて発表・意見交換ができた。
- ・ゼミ活動において、校外での発表会へ5グループが参加し、高い評価を受けたグループもあり今後の活性化にも繋がる結果となった。

(3) 立志につながるキャリア支援

- ・東京大学訪問を実施し、参加者からは意欲が高まった等の感想をもらうことができた。
- ・難関大志望者について、今年度は進路課から直接生徒へ意義等を伝えることとしたが、十分な成果とはならなかった。
- ・人権だよりは年3回発行することができ、保護者あてにもデータで送信することができた。
- ・人権に係る講演会では、保護者にも参加を促した。
- ・学校自己評価アンケートでも「人権意識を高めたり、人権問題について正しく学ぶ機会がある」の項目において92%の生徒があてはまると回答した。また、保護者・教員についても数値が上昇した。

(4) 国際交流の充実

- ・数週間のホームステイや1年間の長期留学など学校をとおして海外へ出て行った生徒が6名となった。その他にも個人レベルで海外へ出た生徒も複数名いた。
- ・海外での経験を個人のものだけにするのではなく、報告会を全校に向けて実施することで、貴重な体験を他の生徒にも共有することができた。
- ・海外からの学生3名の受け入れやオーストラリアBarker Collegeとの交流により、多くの生徒に異文化交流の楽しさを体感させることができた。
- ・次世代リーダー養成プログラムとしてシンガポールでの海外研修も実施することができた。

(5) 生徒が主体となって企画する行事の充実

- ・倉敷市内生徒会交流会を本校がホスト校となり開催した。8校が参加し閑谷研修センターで、各校の情報共有やルールメイキングについての意見交換が活発に行われ、リーダー育成に大いに期待できるものとなった。
- ・部活動や委員会が中心となって小学校との交流会等も行うことができた。

2 学校関係者評価委員名

森川政典（大原美術館副館長） 宮本浩治（岡山大学教育学部准教授）
松本一郎（岡山理科大学非常勤講師） 徳田政太郎（同窓会副会長） 小川 灯（PTA会長）

3 学校関係者評価

- ・地域社会や国際社会を牽引するリーダーとして、その発展に貢献する人材の育成を目指すというスクールミッションを達成するために様々な取り組みをされており、今後さらに期待できる。
- ・先生方の頑張りがよく伝わってきた。
- ・成果等が中学生の目に触れるように、もっとSNSを活用してもよいと考える。
- ・学校自己評価アンケート結果については、よくあてはまるだけでなく、ややあてはまるも肯定的に捉えてもよいと考える。
- ・難関大への動機付けについて、進路課だけでなく担任をうまく活用するべきである。
- ・中上位の生徒に対していかに粘り強く教員が頑張ることができるかが鍵となる。
- ・タブレットの活用も進んでおり、主体的に学びに向かっている印象を受けた。
- ・達成基準については、もう少し踏み込んだ基準を定めたほうがよい。
- ・姉妹校締結を含む、国際交流活動のさらなる活性化に期待する。

4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

○高質な学力を身につける